
精神科臨床リポート

精神分析理論が活かした8つの事例

小林 和編著

金剛出版, A5判 336頁, 4,620円, 2025年9月刊

(伊敷病院) 神田橋條治

書店の棚に本書を見かけ、「精神科臨床」の文字に魅かれて伸ばしかけた手を、「リポート」「精神分析理論」の二文字に気づいて、ひっこめた方もありましょう。ボクも「リポート」は未知のコトバでしたから、スマホで検索したら「再起動」という、パソコン用語だそうです。さらに「過去の作品シリーズを、過去の設定や物語に縛られずに、一から再構築して作り直したバージョン」の意味もあるそうです。代表著者、小林和医師の「覚悟・確信」をこめた書であることの表明です。とはいえ、堅苦しい内容ではありません。理論書でもありません。それぞれ、治療者の異なる、8症例の提示と、個々の治療経過についての、専門家たちの助言や、小林さんの感想・連想を集めた、乱雑で生々しい、現場へ誘う、発言群です。一貫して流れるのは、「精神分析治療」に心身のすべてを投入した、小林さんの歩みです。

目を転ずると、今日の精神科治療の内容は、薬物・生活助言・認知行動療法・集団療法その他、の花盛りです。それらに共通するのは、「治療者の精神内界は、治療現場と切り離されている」という構造です。実はその構造こそ、すべての「技術の確立」目標です。その構造を堅持することで、精神科治療は、他の治療法の仲間になることができました。「精神分析」もそれを目指しました。そして、多くの「いのちの苦しみ」は放置されました。「エリートのための治療」「被疎外者の排除・疎外」です。

小林さんは、我が国における、最高水準の、精神分析トレーニングを受けておられます。ただし、我が国の輸入文化の特性としての、「甘さ」から、多くの病を「排除」せず、受け入れる傾向があり、そこから「甘え理論」が生まれ、世界の理論本幹の閉塞に、風穴を開けました。

それはともかく、「精神援助」を志す小林さんは、「あなたは向きません」と排除することが、納得できません。ほとんど「七転八倒」の模索の末、精神分析のメッカである「メニングークリニック」での体験も試みましたが、そこも「選ばれた者への、選ばれた視点からの治療」でした。その体験記を読むと、今日の精神分析の凋落が納得できます。

志を捨てない小林さんは、自ら体得した「視点」を堅持して、新しい治療現場を構築することにしました。「リポート・再起動」です。それは期せずして、世界の精神分析治療界の潮流と響き合っています。この小林さんの苦闘の歴史に寄り添って、本書を拾い読みするのが、第一の読み方であり、学問好きの人に「お勧め」します。「屹立する学問ではない、現場で生きる精神分析」です。

そして、小林さんの仲間たちによる実例が、8つの症例報告です。すべて、治療者・患者、両者の関係、を視界に置いた、援助・治療報告です。20年という「非常識」な治療関係さえあります。「これが精神分析？」と思われる方もありましょう。そうです、援助関係の双方、両者の心身反応までも視野に入れた「関与しながらの観察」が表にあり、精神分析の視点は、その背後に「付かず離れず」添い続

けるのが、小林さんの到達した「精神分析」の世界です。「発展」と称する、昨今の複雑な理論図式は、「寄り添い」を妨げます。小林さんのグループは、患者に添い続けるセラピストの「前意識」のあたりに、「精神分析の視点」があり、それが、「スーパーバイザー」のように、自らの営みを見守る構造です。重症の「病む人」をも排除しない、との決意のもとに、小林さんが「リポート」した、「精神分析」の構造です。その「濃く深く・複雑」な在りようが、8症例に例示されています。その本質を、文字で読み、イメージするのは難儀ですが、少しばかり助けになる工夫があります。討論に参加している8人のコメンテーターは、本書の最後のページに、お名前が列挙されています。インターネットで検索すると、皆さん、精神分析を表芸となさっている権威者です。幾多の業績が列挙されており、知的な豊かさが推測できます。大学の教師は「浅くとも広い視野」を必要とします。しかも、幸いなことに、全員お写真が掲載されています。その写真を眺めながら発言を読むと、把握感が濃くなります。あらかじめ、お名前ごとに、本書のすべての発言を読み、各人の、知・情意のありよう、のイメージを描いてから、個々のケースへのコメントを読み、加えて、討論に参加している方々の発言をも比較しながら、読んでみましょう。それぞれの発言者が、「関与」と「観察」をいかほど行っている専門家であるか、を診断できます。そして、理解が一層深くなり、いささか盛り込み過ぎで重たいこの本、に圧倒されることなく、宝の山を散策する「野次馬」の気分さえ湧いてきましよう。各人の「治療者魂」あるいは「観察者魂」の「リポート」が生じ、アイデンティティーの「リポート」の効果もありましょう。

ところで、小林さんは「老人性難聴」の兆しがあり、「第一線からの退却」を計画しておられるらしいです。ボクはこの数年「老人性難聴」で、補聴器を使用しています。「聴く」力が衰えたので、代替の、新しい診療技法を工夫するのを楽しんでいます。「苦し紛れ」は「精神療法」ですねエ。